

株式会社箱秀紙器製作所



■ 昭和11年創業の箱秀紙器製作所の本社



■ 主力商品の化粧箱



■ チョコ菓子パッケージのカピバラ



機動力とアイデアを誇る富田委千弘社長

data : はこひでしきせいさくしょ

代表者役職名・氏名／代表取締役社長・富田委千弘
設立年月日／昭和52年4月30日
住 所／〒440-0004 豊橋市忠興3丁目12番地の8
電 話／0532-62-6121
F A X／0532-63-3171
U R L／http://www.hakohide.co.jp
E-M a i l／it_omita@hakohide.co.jp
資 本 金／1000万円
業 種／化粧貼箱、段ボールケース、印刷紙器の設計、製造販売
従業員数／18人



■ 図面通りに紙を切れるカッティングマシン

環境変化で包装資材減少

箱秀紙器製作所は昭和11年創業の老舗箱メーカー。富田委千弘社長の祖父に当たる富田秀久氏が当時、豊橋市やその周辺の東三河地区で生産された糸や海産物を入れる箱を製作していた。社名は「箱屋の秀さん」から生まれたという。

その後、和菓子や木工製品向けの包装資材を手がけ、生産設備も増強した。産業構造の変化に対応し、自動車の補給部品や機械工具など工業製品向けなどのパッケージも増えていった。一方で簡易包装化やネット通販の拡大など取り巻く環境は大きく変化。かつて地元で50社

以上あった箱メーカーは10分の1程度に減少した。

「大手と価格競争しても勝てない」。富田社長は防水など機能性で差別化を図り、小ロット即納など地の利を生かせる地域密着型の包装資材に注力する決意を固めた。小回りがきく機動力とアイデアで活路を切り開く戦略に大きく舵を切った。

複雑な形状も最短で翌々日出荷

箱の開発はまず中身に応じて設計、その図面をベースに木型を製作する。かつて手書きだった設計作業はCADの導入でデジタル化されたが、外部に木型を発注するため、サンプルが届くまでに3日。それを検

討して改良点をフィードバックして金型が製作されるまで1週間から10日間かかっていた。

「平成27年度補正ものづくり・商業・サービス新展開支援補助金」を活用して導入したのは、設計からサンプル製作までデジタルデータでやりとりできるソフトウェアと図面通りに紙を切るカッティングマシン。これにより複雑な形状の紙箱でも最短で翌々日に出荷できるようになった。月5〜6万円かかっていた外注費を削減でき、リードタイムを大幅に短縮。大手との競争力も高まり「何よりお客さんの困り事に対処できるようになったのがうれしかった」（同）。

水族館とコラボでヒット商品

導入したカッティングマシンは、CADで作成したデータ通りに厚紙をカットする。これにより、複雑な3次元形状の箱もスピーディーに開発できるようになった。

癒やし系動物として人気のカピバラ。同社が製作したカピバラのパッケージは毛並みもリアルに肉球など細部まで再現されている。そのお尻部分を開けると黒々としたフン、ではなくチョコ菓子が現れる。蒲郡市の竹島水族館や地元企業とのコラボレーションで平成30年に発売したお土産「カピバラの落とし物」は1日100個以上が売れることもある大ヒッ

ト商品となった。

遊び心あふれるこの商品は、経営者勉強会で知り合った竹島水族館の小林龍二館長や和菓子店の童庵、画像や写真撮影を担当する三愛企画など各分野のプロが知恵とセンスを結集。富田社長は自らCADシステムとカッティングマシンに向き合い、夜な夜な箱のサンプルを製作した。

アイデア勝負で技術をカネに

コラボ商品第1弾は平成28年5月発売の「超グソクムシ煎餅」だ。オオグソクムシは「気持ち悪いけどかわいい」「メカっぽさがかっこいい」と、話題の深海生物。第2弾は原寸大の全長70センチメートルで、インパクト

大の「超ウツボサブレ」。複数のウツボが絡み合い、竹島水族館でも「気持ち悪い」と評判のうつぼを土産商品にした。

カピバラは第3弾で、初めて設計ソフトとカッティングマシンを導入した。オオグソクムシ、ウツボに比べ、形状は複雑だが、パッケージの開発期間は大幅に短縮された。

こうしたアイデア商品のヒットにより、箱やポップの設計だけの仕事も舞い込むようになったという。今年の夏休みには赤いウツボ(前回は黄色)に、メダカの成長の様子がわかる新製品も発売した。「技術をお金に換える新しいビジネスモデルの構築につなげたい」（同）と意気込む。